

第4章 ある入所者の一日の活動を追って

田中 文恵

0. はじめに

この章では以下のようなことについて考えていきたい。

本稿を執筆するにあたり、調査対象者の一日の生活をビデオ撮影を行い観察した。その一日の生活場면을大きく三つに分類すると、「食堂・宿舎・職場」となる。そしてそれらの生活場面のそれぞれにおける注目点を取り上げた。

この研究では、データを丁寧に観察することに徹した。そうすることで、撮影当日にその場では気付かなかった点が見えてきた。それは、例えば付録の袋詰め作業の際に観察されるような、袋に付録を順番どおりに不足なく詰めていくというようなマニュアル的課題ではない実際の課題が存在するということである。加えて、その実際の課題は連鎖していることがわかった。マニュアル的課題は調査や観察を行わなくても把握することができるが、実際の課題やその連鎖というのは実際に調査・観察を行わなければ見えてこない点である。

実際の課題とその連鎖がどのようなものであるのか、撮影データをもとに詳細に示していきたい。

1. 調査の概要

1-1. 社会就労センターセルフZ園について

今回の調査では、A県T市にある社会就労センターセルフZ園（以下、Z園と表記する。また、ここでの地名、施設名、人名などは全て仮名表記する）にご協力いただき、二度の訪問をし調査を行った。このZ園は職業訓練施設と宿舎が併設されている施設で、「働く意欲と能力をもちながら、障害のため一般の企業に雇用されることが困難な人たちが入所し、必要な訓練と働く機会と場所を得て、作業訓練費により自活すること、将来の職業自立を目指す」ことを目的としている施設である。この施設には、通所者と入所者の二つのタイプの施設利用者がいる。今回の調査で私が担当させていただいた調査対象者である北川信一さんは後者のタイプで、宿舎（二人部屋）から職場である軽作業場へ通う生活をされているが、休日である土曜日と日曜日には実家に帰省されている。

なおZ園の詳細な概要については、第1章の林の「食堂の中の交差点一車いすのエスノメソドロジー2」を参考にして頂きたい。

1-2. 北川信一さんについて

調査対象者である北川さん（男性）は現在24歳で、Z園に入所して5年目になる。Z園に入所する前にはA県Hにある学校とセンターが併設された施設に入所されていた。

両足に装具を使用されており、比較的長距離の移動の際には装着されている。右半身に障害があり右手が少し不自由であるため、主に左手をよく使われる。

北川さんの仕事の担当は、軽作業科での少女漫画雑誌の付録を袋詰めするという作業である。

1-3. 調査概要

2004年の7月29日と8月4日にZ園を訪問し調査を行った。7月29日には、調査対象者の方に日常生活や装具等について1時間程度のインタビューを行い、MDによる音声録音を行った。また8月4日には、午前7時30分の朝食時から作業が終了（午後5時）して夕食を食べに食堂へ向かう午後5時30分過ぎまでの、一日の生活の様子について調査を行った。事前に施設と調査対象者の方から許可をいただき、ビデオカメラによる撮影とMDによる音声の録音を行った。ビデオカメラには三脚を付け、作業中などの移動がない時には三脚を広げてビデオカメラを固定して撮影を行い、移動がある時には三脚を付けたままの状態ですら調査対象者に常について回る形で撮影を行った。

また、2004年12月15日にも再度Z園に訪問した。その日も撮影を行う予定であったが、事前の連絡の不備のために調査対象者である北川さんが不在であることを確認できておらず、残念ながら撮影を行うことができなかった。

2. 注目点

先にも述べたように、北川さんの一日の生活場面を(1) 食堂 (2) 宿舎 (3) 職場の三つに分類した。そしてそれぞれにおける興味深い注目点を取り上げると以下のようなになる。

- (1) 食堂：バナナの皮をむき食べている場面
- (2) 宿舎：目的別で装具の装着と二つの靴を使い分けている点
- (3) 職場：作業におけるテクニック

(1) では、バナナの皮をむき食べるという流れの中で、よく使う左手と不自由である右手でその目的によってバナナを何度も持ち替えるという場面が見られた。(2) では、北川さんは歩く距離の長さによって装具の装着と二足の靴を使い分けているのだが、その使い分けがいつもと異なる場面が見られた。どうしていつもと異なる使い分けをしたのか、見ていきたい。(3) が最大の注目点となるのだが、付録の袋詰めの作業においての特筆すべきテクニックと、その作業における実際的課題というものが見えてきた。

これら三点について、次節で詳細に述べていく。

3. 考察

3-1. バナナの食べ方

ここでは、食堂での朝食時における北川さんのバナナの食べ方について取り上げる。彼はバナナやデザートが付いた朝食のうち、それら以外の主な食事を終えた後にバナナを食べ始める。

まずお膳の上に置かれたバナナを、よく使う左手で取り障害のある右手に持ち替える。そして右手で掴んでバナナを固定し、左手で皮をむき始める。(【画像データ 1】参照) そしてある程度皮をむくと、今度は左手に持ち替えきちんと皮がむけているかどうかバナナを左右に回転させながら確認する。きちんと皮がむけていなかったためもう一度右手に持ち替え固定し、左手で皮をむく。そしてもう一度左手に持ち替えバナナを左右に回転させながら確認する。きちんと皮がむけたのを確認し、そのまま左手に持ったまま食べ始めるという場面が見られた。(【画像データ 2】参照)



【画像データ 1：バナナを右手で持ち、左手で皮をむいている場面 (2004.8.4 AM7:42:07 カメラ 9)】



【画像データ 2：バナナを左手に持ち替え食べている場面（2004.8.4 AM7:42:14 カメラ 9）】

これらの一連の動きは、一見時間がかかり煩わしく不自然な動作であるように感じられるかもしれない。しかし北川さんにとっては、左手で取ったバナナをそのまま左手で固定し障害のある右手で皮をむくことは困難であるし、右手で皮をむくことができたとしても、左手で行うよりも数倍の時間が必要であるということは容易に推測される。また、右手に固定し左手で皮をむきそれを左手に持ち替えて食べるという動作にも北川さんなりの秩序がありそれに即した動作であると考えられる。右手を口元まで持っていくことが困難であるから左手に持ち替えて食べるということがあるのかもしれないし、右手を口元まで動かさなくても、口を右手のほうへ動かすということも考えられるが、よく使いよく動く左手に持ち替えて食べるということは、北川さんにとって当然のことであるし、これらの動作における秩序なのである。

3-2. 二つの靴

北川さんは、二つの靴を使い分けて使用している。それは装具を装着したときに履く茶色の靴と、装具を装着しないときに履く黒色の靴である。それぞれの使用目的は歩く距離の長さによって異なる。（【画像データ 3】参照）

例えば、仕事場である軽作業場へ向かうときや食堂へ向かうとき、または外出するときなど比較的距離の遠いところへ歩いていく場合などは、装具を装着し茶色の靴を使用する。また黒色の靴は、自室から近くの洗面所へ行くときや実家へ帰省するときなど、歩く距離が比較的短い場合に使用される。このことは、インタビューでの「(実) 家に帰るときは装具を付けずに普通の靴（黒色の靴）で帰る」（第IV部 付録 第1章の田中のインタビュー記録参照）という語りや、職場や食堂に向かう場面、洗面所に向かう場面それぞれの撮影で確認している。



【画像データ 3:装具を付け茶色の靴を履いている様子(2004.8.4 AM9:07:33 カメラ 9)】

撮影当日、北川さんは体調が思わしくなく朝食後に熱を測ったりされていた。そして部屋に帰ってきてからもベッドに横になっていた。Z園の午前の仕事の開始時間は9時であるのだが、この日は9時を過ぎても部屋のベッドで横になったままであった。定時を過ぎても作業場に北川さんがいなかったため、男性職員が北川さんの部屋へ様子を伺いにくるといことが見られた。

①	AM9:05:45	ベッドから起き上がり部屋の近くの洗面所へ向かう。そのとき、装具を装着し茶色の靴を使用。
②	AM9:14:15	洗面所から部屋に戻る。
③	AM9:16:06	作業場へ北川さんが来ていなかったため、男性職員が部屋に様子を見に来る。
④	AM9:16:44	男性職員が「(仕事に) 出て来られそうだったら出ておいで」と言い残し部屋を出て行く。
⑤	AM9:17:07	北川さんは、作業場へ向かうために部屋を出る。

【表 1】

上の表 1 の①から⑤は、北川さんが作業場へ向かうまでの一連の流れを記述したものである。ここで注目すべき点は、①9:05:45 の靴である。先にも述べたように、北川さんは洗面所等の比較的歩く距離の短い場所へは装具を付けずに黒色の靴を使用する。ベッドから起き上がる前は装具も靴の履いていない状態である。部屋の近くの洗面所へ行くだけならば黒色の靴を使用するのが自然なように思われる。しかし北川さんは、長距離用である装具と茶色の靴を履き洗面所へ行った。そして、②9:14:15 に部屋へ戻ってきてからベッドに腰掛けたまま、「仕事に行こうと思えば行けるんやけど、行った後また熱が上がると思うし。我慢して行こうと思うけど」と話された。③9:16:06、④9:16:44 と、男性職員が北川さんの様子を伺いに部屋を訪れ、退室した後すぐに北川さんはベッドのすぐ横にある扇風機を止め、作業場へと出向いて行った。

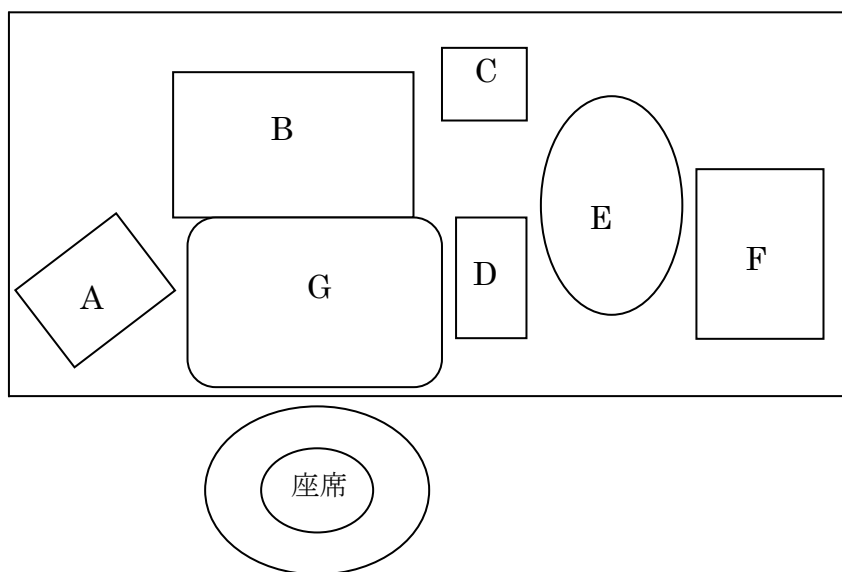
ここで疑問になるのが、何故北川さんは①9:05:45 の時に装具を装着し茶色の靴を

使用したのかということである。二つの靴の使い分けは北川さんにとっては日常的事であり、ただ間違えたということは考えにくい。また、先述の②9:14:15 の後の北川さんの語りから、仕事に行くか否かの迷いが見られるように思える。しかし、①9:05:45 の時点で装具と茶色の靴を使用していることから、この時には既に北川さんの中で「仕事に行く」と言う考えに大きく傾いていたのではないだろうかと考えられる。けれどもなかなか考えに踏ん切りがつかないために作業場へ向かわず部屋にいたのではないだろうか。男性職員が北川さんの部屋から出て行った後すぐに北川さんも仕事場へ向かったことから、男性職員との接触によって北川さんの中で気持ちに踏ん切りが付き、「仕事に行く」という選択をしたのではないかと思われる。

部屋の近くの洗面所という近距離に移動するのに使用された装具と茶色の靴には、北川さんの「仕事に行く」事に対する考えが表されていたと言える。

3-3. 作業における工夫と実践的課題について

ここでは作業の過程で見られる工夫とその過程での実践的課題、またその課題における失敗を回避するためのテクニック等について述べていく。以下、下の図1と次頁の表2を用いて記述していくので参照していただきたい。



A: 赤色のビニール袋 (収納袋に入っている) B: 透明のビニール袋 (収納袋に入っている) C: 冊子 D: 封筒 E: 財布 (山積みされている) F: 厚めの紙
G: 作業スペース

【図1: 付録の袋詰め作業に使用される物の配置図】

上の図1は、北川さんと北川さん以外の6人の方が作業されている同じ机のうち、北川さんが作業を行っているスペースだけを取り出し、作業に使用される物の配置を示したものである。

座席からAまでの直線距離は約25cm、同様にBまでは約30cm、Cまでは約40cm、Dまでは約25cm、Eまでは約30cm、Fまでは約40cmである。北川さんは体幹を軸

にし、A から F の物を左手を伸ばして取っていた。A から F の物を総て左側に置くと効率が良いように思えるが、左側には別の作業を行っている方がおりその方の作業に必要な物を置くスペースとなっている。

作業の順番	作業内容	視線	手
①	・ B を一枚取り作業スペース G に置く。 ・ その際、B の開いている方が常に左手側になるように置く。	B	左手
②	・ F を取り、G に移動した後の B の上に置く。 ・ 必ず B よりも少し手前にずらし、F の上部が常に左手側になるように置く。	F	多くは左手。 右手の場合もある。
③	・ A を取り、作業者の体幹から遠方側の F のへりと右上方の角を合わせて置く。	A	左手
④	・ D を取り、先ほど重ねた F・A の、作業者の体幹から遠方側のへりと右上方の角を合わせて置く。 ・ 常に D の上部が左手側になるように置く。	D	左手
⑤	・ C を取り、先ほど重ねた F・A・D の、作業者の体幹から遠方側のへりと右上方の角を合わせて置く。 ・ 常に D の上部が左手側になるように置く。	C	左手
⑥	・ 作業スペース G にある先ほど重ねた F・A・D・C を左手で手前にずらし、親指で F を V 字に曲げ全体を持ち上げる。	作業している 手元	左手
⑦	・ B の口を右手で開け、F・A・D・C を入れる。	作業している 手元	右手で B の口を開け左手で入れる。
⑧	・ 全体を机上で軽く叩き、袋内配置を揃える。	袋内配置を揃えている袋	左手
⑨	・ 最後に F・A・D・C が入った B の中に E を入れる。	E	左手

【表 2】

表 2 は、図 1 の配置の諸々の付録の袋詰め作業の順番と、それぞれの物を取るときに左右どちらの手を使用しているかと、その時の視線の先を示したものである。付録を取る順番は B→F→A→D→C→E で、B の上に F、その上に A というように上に上に C までを重ねていき、すべてを B に入れ終えたあとに E を入れて完成となる。1 つを完成させるのに要する時間はおおよそ 1 分 30 秒で、10 分間で約 6 つの物が完成する。

表 2 の①から⑨の作業の様子を丁寧に見ていくと、作業⑥において注目すべき点がある。それは、重ねた F・A・D・C (以下、X と表記する) を B に入れる時に、X (正確には F と A) を軽く V 字に曲げるという点である。

まず、X (正確に言えば F の左端) を左手で手前に引き寄せる。その時の視線は X を持っている手元にある。(画像データ 4 参照) 次に、X の左端の中心位の位置に親指がくるようにもち、その親指を使って X を V 字のような形に軽く曲げる。この時の視線は X にある。

(画像データ 5 参照) そして X を少し持ち上げる。この時の視線はまだ X にある。(画像データ 6 参照) その後視線を X から B へ向け、右手を持ち上げ (画像データ 7 参照) B の口を開ける。



【画像データ 4 : 重ねた付録を手前に引き寄せる場面 (2004.8.4 AM9:24:12 カメラ 9)】
矢印は視線を表している。以下、画像データ 5 から 7 も同様。



【画像データ 5 : 紙を V 字に折り曲げる場面 (2004.8.4 AM9:24:13 カメラ 9)】



【画像データ 6：重ねた付録を持ち上げる場面（2004.8.4 AM9:24:13 カメラ 9）】



【画像データ 7：右手を持ち上げている場面（2004.8.4 AM9:24:14 カメラ 9）】

これらの作業は単調なもののように映るが、そうではない。大きな山場とも言える点がある。それは、注目すべき点である、X を V 字に曲げる場面である。北川さんは、X を V 字に曲げて持ち上げる際には X の方へ視線を向け F の上に乗っている A・D・C が落ちないかどうかの安定感を確認してから、B の方へ視線を向け入れていることがわかる。そうす

ることでスムーズに X を B に入れることができ、より時間を短縮できる方法である。X を V 字に曲げないと上に乗っているものは落ちてしまい上手く持ち上げることはできないし、B のような柔らかい素材の物にスムーズに入れるのは時間がかかる作業である。X を V 字に曲げることは、この作業をスムーズに行うための素晴らしいテクニックであると言える。

また、この作業の最大の山場へ向けてのスタート点となるのが表 2 の①から⑤である。①から⑤では総ての物を F の右上方のヘリと角に合わせて重ねて言っていることがわかる。これは、X を V 字に曲げ持ち上げる際に重ねた物を落とすことなく上手く持ち上げるための準備であり、B に入れる時にスムーズに入れるための準備でもありまた、袋内配置を揃えるという時間の短縮にもなっている。それと同時に、総ての物を F の右上方のヘリと角を重ねるというやり方のために A・C・D・E・F が総て見える形となり、B に入れる前にそれまでの不備がないかどうか確認できる。そうすることで、完成までの時間を短縮することができると言える。上記の作業が上手くできれば一番短い時間で作業を終えることができる。

以上は作業が成功した場合であるが、次に一つの失敗例を挙げてみる。撮影したデータの AM9:56:59 に X が B になかなか上手く入らず、成功した場合よりも時間がかかるという場面が見られた。この場面をよく観察してみると、成功した場合よりも C が少し全体から外側へずれていることが見られた。外側へずれた C が B に引っかかり上手く入れることができないということが起きていた。そのことで一つの作業にかかる時間が成功した場合よりも長くなってしまった。

これらのことから、この作業における実践的課題が見えてくる。表面的に見られる作業の流れ、例えば A・C・D・E・F を重ね B に入れるというようなことはこの作業におけるマニュアル課題と言える。そうではなく、A・C・D・F を重ねていく際に総ての物の右上方のヘリと角を合わせることで、X を B に入れる際に X を V 字に曲げること、そして V 字に曲げて X の上に乗っている物を落とさないようにすることこそがこの作業の実践的課題である。それだけではなく、これらの実践的課題は「右上方のヘリと角を合わせる一落とさないようにする—V 字に曲げる」というように連鎖していると言える。X を V 字に曲げたときに上に乗っている物を落とさないために総ての物を右上方のヘリと角に合わせて重ねていき、それらを B に入れる際に落とさないために X を V 字に曲げるのである。そして、B にスムーズに入れるという課題へとつながっていく。実際的課題の連鎖を成功させることが、作業時間を短縮させ作業を成功させることになるのである。この実践的課題の連鎖は作業を成功させるための秩序だったものであると言える。

4. まとめ

これまで北川さんの一日の生活を食堂・宿舎・職場に分けて見てきた。食堂での、バナナを左手で取り右手に持ち替え固定し左手で皮をむきまた左手に持ち替えて食べるという一見不可解な動作の中にもその状況に即した秩序があることを述べた。続いて、宿舎での装具と二つの靴の使い分けの点におけるいつもと異なる靴の使用には、北川さんの「仕事に行く」ことの意味が表れていたことがわかった。最後の職場での作業には、表面的に見られるマニュアル的課題ではないその作業の流れに必要な実践的課題があり、その実践的課題は連鎖しているということがわかった。これら全体を通して言えることは、様々な特殊な形に見える行為の中にもそこには秩序があるということである。

例えば、3-3 で取り上げた作業の場面での北川さんの仕事の構造は、障害者ゆえに特殊な形になっていると捉えられるかもしれない。しかしながらそうではなく、実際の課題の連鎖が秩序だっているという点においては、健常者と同じであると言える。障害者であろうと健常者であろうと、一つの物事の中にはその物事における状況に即した秩序があるのだ。本章を通して主張したかったことは、すべての行為や状況が障害者ゆえに特殊な形になっていて、それがいかに健常者の物と異なるかということではなく、障害者ゆえに特殊な形になっているがそこには秩序があり健常者と変わりはなく同様であるということであ

る。障害者の特殊性を健常者と比べることで際立たせそれを障害者ゆえであると結論付けるのではなく、障害者の生活も健常者と同様なのであるということを述べたかった。

そのためには、この調査で行ったような時間をかけた調査・観察をすることが大切であると思う。3-3 で述べたような実際の課題の連鎖は調査やデータをじっくりと観察しないとわからない点である。このようなことはどのような研究においても共通する点であると思う。時間をかけて調査することやじっくりとデータを観察することで、常識や先入観にとらわれずにその物事における驚くべき事実が発見できるのではないだろうか。